
無力のアビリティズ

常葉達彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無力のアビリティーズ

【Nコード】

N1727Y

【作者名】

常葉達彦

【あらすじ】

超能力を操る3人の少女「アビリティーズ」
自分達の人生を狂わせたモノたちへ贈る復讐劇。
そしてやがて知る力の意味。

プロローグ（前書き）

少し暴力的な表現を使いますが、
明るさと暗さをバランス良く書ければと思います。

プロローグ

プロローグ

「……無力」

ボロボロになった少女たちは、冷たいコンクリートに横たわったまま動かない。

そんな彼女たちを見下ろしている一つの影がそうつぶやいた。

「ど、どうして……」

「あら、まだ意識があるの」

一人の少女がぶるぶると震えながらも、立ち上がった。

その膝はもう自分の体重を支えるのに必死で、とてもじゃないが歩けるような状態ではなかった。

「どうしてアタシの力が効かないんだッ!？」

「無力、だから。貴女は私に対して全くの無力。それだけのこと」
その挑発とも取れる科白に、怒り心頭の少女は奇声にも似た大声を上げながら、掌を自分の影に向ける。そして、その中からずるりと何かを引っ張り出した。

それは少女自身の影。

少女はその動かない足を自分の影の中に半分だけ落とすと、影が彼女を乗せて疾走し始めた。

物凄いスピードで移動する少女は、その手に持っていた黒くて不気味な物体を偉そうに見下している女に投げつけた。

「わからない？　なら、わかりやすく解説、してさしあげましょうか」

一直線に飛んでくる黒い物体は、女の目の前で複数に分裂した。それぞれ野球ボールくらいの大きさの球体は、四方八方に散らばると、

パカリ、と大きな口を開けた。それは揶揄でもなんでもなく、球体が半分に分れて、そこから鋭い牙がずらりと並んでいるのが見えるのだ。

「うるせえっ！ てめえだけは殺す！ 今すぐ殺す！」

「……ある所に一人の少女がいました。彼女は超能力、という便利で強大な力を持っていました」

四方に散った影の球はその鋭い牙を晒しながら、女目掛けて高速で飛んでいく。

「彼女はその強大な力を持ち、自信に満ち溢れていました。家族に慕われ、友人に恵まれ、何不自由ない生活を送っていました。それが約束されていたのです、強大な力のおかげで」

「黙れ黙れ黙れええっ！！」

一斉に襲いかかる影の群れは、その牙を女の肌に突き立てる。

影はやがて、彼女の姿を完全に覆い尽くし、そこには女のシルエットだけが残った。

「はあっはあっ……くたばれ、クソ野郎」

全身を影の牙で噛んだ。ボロボロの少女は、容赦ない攻撃で女を殺した。

「だが、それは間違いだった」

「！！」

闇夜に木霊するのは、お話しの続き。女の声だった。

「なっ！？」

「彼女の力は決して大きいものじゃなかったのです。哀れ、少女の

家族は無惨にも殺され、友人は彼女から離れていきました」

女のシルエットから、小さいながらも眩しい程の光が漏れ出していた。

その光がどんどん範囲を広げ、逆に影がだんだんと少なくなっていく。

「あ……あ……まさか……アンタの能力って……！」

「両親を殺された少女は恨みました。殺した犯人を見つけ出して、復讐してやる、と」

全身が光り輝いている女は、影を完全に浄化し不適な笑みを浮かべながら

平然とした様子で話を続けていた。その肌に傷は一切無い。

「たい……よう？」

唇の両端をニッと吊り上げた女は、いつの間にか少女の目の前に立っていた。息が掛かるほどの距離に顔を近づける。

「お父さんのカオが無いのは誰のせい？」

「あ……あ……やめて……」

ついに限界を迎えた少女の膝は力なく折れ、その場にへたり込んでしまった。さらに女の言葉は続く。

「お母さんのアシが無いのは誰のせい？」

「やだ……おかあさん……！」

両耳を塞ぎ、相手の声を聞こえないようにする。

しかし、女の距離は近づいてくる。頬を撫で、髪に触れ、耳元でささやいて来る。

「止まらない血、聞こえない声、動かない体、それは一体誰のせい？」

「やめて、やめて、やめて、やめ……てッ！」

少女はイヤイヤをする子供のように頭を振って女を拒否する。

「それは私がヤツたから。ほら、貴女の願いの光はもうすぐそこまで来ている。ほら、この胸を貫いたら貴女はその光に包まれる」

その少女の腕を強引に掴むと、自分の胸に押し付けた。
女性特有の膨らみから少女の手に心臓の鼓動が伝わった。

「あ……ああ……いや……やめてよお……」

三日月のような笑顔を浮かべる女の前に、少女はその大きな両目から涙が溢れて止まらなくなっている。

「ほらほらほらほらあっ！！ 殺せ殺せ殺せ！ 私を殺せ！

殺せるものなら殺してみろ！ 貴女のシャドウで刃を造り、私の心臓を貫けば、殺すことなど造作も無い！ お父さんは痛かったろうな！、お母さんは苦しかったろうな！。でもそれは誰のせい！？
ほら、泣いてるだけじゃ殺せない、怒り、憎しみ、恨み、それを変えて、私を殺してみなさいっ！！」

その瞬間、彼女たちの足元にあった影が鋭い槍の形状に変化し、女の胸目掛けて射出された。

超能力集団アビリティーズ（1）

彼にとって、それは最高に理不尽な夜だった。

それはお世辞にも綺麗とは言えない、裏路地の一角。時刻は午前2時。

オフィス街であるこの街は夜にもなると人氣がさっぱりと無くなり、その路地裏ともなれば人の氣配など皆無に近かった。

街灯の明かりに照らされる3つの影は、その先を走る1つの影を追っていた。

「はあっ……はあっ！　ちくしょうっ！　ダメだ、追いつかれちゃうっ」

追いかけられている影が、息も切れ切れにそう悪態ついた。

街灯の下を走るその姿は、30代と思われる男性だ。

何時間も前に終わっている、古い洋食屋の前にあった青いポリバケツを彼は走り際に蹴り飛ばした。

静寂な路地裏に轟音が鳴り響き、ポリバケツの中に入っていた生ごみが、

コンクリートの地面に散らばった。

「あぶねっ！　……にやろー、アレ誰が片付けるとかってんだ！」

「アナタじゃない、ってことだけは確かね」

「明日の朝、洋食屋さん大変だねー」

先を走る男を追いかけるのは、3つの影。

その姿は多く見積もっても、二十歳には到底見えない少女たちだった。

1. 超能力集団アビリティーズ

それは異様な光景だった。女を追いかける男、という下衆な構図はそれとなく理解されるのだろうか、

男が女に追いかけられる、それも年端も行かない少女たちに命からがら逃げるという状況に対して、一般的には理解しがたい光景である。

「!?!? ……はあっはあっ……ダメだ、もう逃げ切れねえ」

やがて男が辿り着いたのは、ビルの壁に囲まれた袋小路だった。

もう体力的にも限界だったのか、男は膝について肩で息をしている。

「やっと追い詰めたよ。ま、こういう狭い道を抜けようとするならそれなりに地形を把握してなきゃ」

ゆっくりと、余裕の笑みを浮かべながら姿を現したのは、先ほどの3人の少女の一人。

外見年齢17、8と言った所だろうか。長くて黒い髪が漆黒の闇と同化して、少し不気味にも見える。服装的にもどこぞにいる女子高生と言って、何もおかしい所は無い程、自然な少女である。

それに続けて、残りの二人もやってきた。

「もしや、と思い泳がせて見ましたが、これ以上やっても無駄なようですね」

「無駄ー?」

同じく二人とも高校生ほどの年恰好である。一人は茶髪のショートカットでメガネをかけている、いかにも勉強ができそうな上品な女の子だ。

一方の一人は、眠気眼のようなやる気の無い表情をしている。

長くて綺麗な金色の髪の毛が特徴的だった。

「ちっ、お、俺を脅したってそれ程有力な情報は出ないぜ？ なんせあのレインボウだからな、お前らだってこの世界で生きてるなら知ってるんだろ？ この世界の掟を」

「掟なら知ってるわ。……光を恨むことなかれ」

「闇を憎むことなかれ」

メガネと金髪の少女がそれぞれ掟を口にする。

「そして、虹と争うことなかれ」

黒髪の少女は憎しみを込めた口調でそう言った。

その殺気とも取れる態度に臆したのか、男は少し身震いをした。

「な、ならわかってんだろ！？ 俺は何も知らねえ！ 本当だ！！」
走ったせいか、それとも黒髪の少女に凄まれて出た冷や汗のせいなのか、男は体中汗だくになりながら後ずさる。

「悪いねえ、オッサン。アンタがレインボウに少しでも関わっちゃったんだからアタシ達はそれを聞かなくちゃなんねーのよ。おわかり？」

ニヤニヤと意地の悪い笑いを浮かべながら、少女はやがて袋小路の中心へと歩みを始めた。それに合わせて男は後ろに下がるしかない。恐怖で足がすくんでいた。

「な、なんだってんだ！ なんで俺がこんな目に合わなくちゃならない！？」

「詠子……その彼女が言った通りです。私達はレインボウに関わるどんな些細な情報も聞き逃さない。ただ、そうやって情報収集しているとお相手の方は大体3通りの方法でお話しして下さいます。それは、”素直にお話しして下さる” ”お金をお渡しすればお話しして下さる” そして―――」

メガネの少女が話し終わる前に、詠子と呼ばれた黒髪の少女は掌を地面に向けて、何か”掴む”動作をした。

「そして”恐怖で自らお話して下さる” により重要なのは3番目。このパターンの方は経験上、有益な情報を持っているものです」
くだらなそうにそう吐き捨てると同時に、詠子の掌に何か黒いモノが吸い付いていく。

「なんだ!？ なにしてやがるその女!!」
遂に下がるスペースを失った男は、壁に背中を張り合わせても尚、後方へと足に力を入れる。

「む、口が悪いなコイツ。シュウ、殺しちゃっていいかな」

「ダメよ。さっきも言った通り、逃げる事までする輩っていうのは得てして有益な情報を持っているものよ。尋問だろうが拷問だろうが、聴き方は問わないけれど、殺すのだけは無し」

ちえ、と口を尖らした詠子の掌には依然黒い何かが纏わりついて、その容積がどんどん増えていつている。

「ねーシュウちゃん」

「あら、何?」

シュウという名のメガネの少女の袖を引っ張る金髪の少女は、物欲しげな視線を浴びせている。

「な、何よ天音^{あまね}」

「おなかすいた」

シュウと詠子は脱力した。

「天音え……アタシだって腹は減ってる。明日も学校なんだから早く寝たいし、どうせこのオッサンだってロクな情報を持ってやしな
いんだから、さっさと殺しちゃいたいって思ったりしてるさ。でも
そのメガネは許してくれないんだ。だから我慢しよう」

目を閉じてしみじみ、と語る詠子にメガネ呼ばわりされたシュウは

無表情ながらも、どうやら少しムツとしたようで

「そうね。どこかの誰かさんが、いきなり脅すような真似しなければお金で解決できた道もあっただろうに。そういえばこの前の情報屋も全て聞き出す前に失神させて結局ほとんど有益な情報は得られなかったかしら。戦闘用の能力があっても、使い方を間違えるとこゝうも使えないとは思わなかったわね。ね、天音」

「え？ う、うん……」

語気を強めたシュウの愚痴に、天音はただうなづくしかなかった。

「な、なんだと！？ 逃げてまで隠そうとする情報が有益なんだってさっきアンタ偉そうに言ってたじゃん！ だったらコイツその有益な情報持つてるって事だろ！？ アタシのお手柄じゃん！」

「さっきは経験上そのような事が多い、って言っただけよ！ その可能性も捨て切れないのに、アナタはそうやって二言目には殺す、ってそれじゃあ、一生かかっても有益な情報なんて引き出せないわっ！」

「ちよつとー二人とも、やめてよ」

口喧嘩をする詠子とシュウ、それを慌てた様子で止めに入る天音。彼女たちの視界には最早、先ほどまで追いかけていた男は入っていない。

困惑するのはその忘れられている男であった。レインボウと言えば、この社会に生きる者に恐怖を与え、秩序を保つ、絶大な力を持つ管理者とも言える組織である。

その情報は些細な情報でさえ、伝える事は勿論、持つ事さえ大きな危険が付きまとうものである。

そんなレインボウの情報を自らこうやって収集するなど、正気の沙汰とは思えない。

ましてそれが、子供のようなケンカをする、事実子供の集団など誰も相手をしないだろう。

馬鹿げていた。

では、何故この男は少女3人から息を切らせ、膝を震わせ、暗い路地の中を逃げ回ったのか。

「ちっ！ とりあえず、コイツをどうにかするのが先だっ！ 続きは後で必ずやるからな、シュウ」

「私は嫌よ。時間の無駄なもの。ただ、この人をどうにかするのが先、というのは同意するわ」

一通り、噛み付きあった二人は、おろおろしていた天音と共に男の方へと振り向いた。

詠子の手には不気味とも言える黒い塊、いや棒状のように形を変えた何かが握られていた。

「おい、オッサン。最後のチャンスだ。大人しく情報を渡すつつうんなら、優しくしてやるよ」

「くっ……！ 頼む！ 後生だ……こんな事をアイツらに知れたら、俺は殺されちまうっ！」

黒い棒の切っ先を突き付けられた男は、詠子の殺気に気圧されるも、未だ口を割ろうとはしなかった。

詠子という目の前の恐怖よりも、その背後に付きまとう恐怖が勝っている証拠だった。

「ふうー。じゃあ、しょうがないね。殺すつもりで行くけど、早々に死んでくれるなよ？ アタシがシュウに殺されちゃうからね」

瞬間、空を切る鋭い音が路地裏に響き、詠子の持っていた黒い棒が、形を大きく変えていた。

それは、槍にしては歪で、剣にしては太く丸かった。

詠子の腕はその物体と同化しており、今や彼女の腕と言っても過言ではない。

「ひっ！」

間拔けな声を上げた男は、再度ずりずりと後方へと逃げようとするが壁が邪魔してそれ以上は動けない。

すると、黒い物体の切っ先が回り出した。

「では最初の質問です。貴方が接触したのはレインボウの誰かしら？ 幹部ならその容姿、コードネーム、能力を述べなさい。暎子、始めて」

「了解」

騎士槍とでも言うのであろうか、2, 3 mはあるであろう長くて先の鋭い物体の全体が恐ろしい速度で回転している。

そう、まさしくそれは”ドリル”と形容すべき武器だった。

黒くて不気味なソレは漆黒のドリルとなって詠子の右腕に取り付いたのだ。

この異様で恐ろしい力を目の当たりにした男は恐怖しながらも、驚愕し、ましては感激さえしていた。

「これが……アビリティズの”力”！！」

先ほどの疑問。

何故この男は年端も行かない若い女に追われて、恐怖を隠しきれずに無様に逃げ惑ったのか。

それはこの少女たちが、かの有名な超能力者集団「アビリティズ」と呼ばれる者たちだったからである。彼女たちに見つかったら最期。標的にされたものは――

「情報を喋らずアビリティズに殺されるか、情報を喋ってレインボウに殺されるか」

二つに一つなのである。

「それじゃ最初は……左腕から」

そして詠子が不気味な笑みを浮かべ、そのドリルの切っ先を男の左腕にピタリと照準を合わせた。

彼にとって最高に理不尽な夜が始まる。

超能力集団アビリティーズ（2）

絶叫が鳴り止むまで十数秒。

回転した鋭い切っ先は彼の腕をいとも容易く貫通した。

「……次は右だよ」

さらに右腕にドリルを突き刺す。

次は、右足。次は、左足。

男の体は影によって体の自由が奪われていた。

詠子はそんな男の四肢に容赦なく、作業のように淡々と、黒く不気味なドリルを突き刺していく。

左腕を突き刺された後、男は一言も発しなくなっていたがそれは痛みや恐怖によって気絶したからではなかった。

彼の痛覚にはなんの痛みも伝わらなかったからだ。

「ど、どうなってるんだ……!?!」

確かに腕や足は貫かれている。その証拠に貫通した箇所は、真っ暗な洞窟のように、穴が開いていた。

不思議なのは、その箇所から血液が流れ出していないことだった。

「あー、あんま動かさない方がいいぞ。マークした所から崩壊するぜ?」

「ま、マーク……って?」

「それ」

腕に身につけていたドリルは回転をやめ、

今は歪な形をした刃物が黒々としているだけだ。

そんな腕とは逆の指で、詠子は男の四肢に付けられた黒い穴を指した。

その穴からは不思議と、その背景を覗くことができなかった。貫通はしているのに、黒い塊で埋められているようだった。

「これが、マーク？　これがなんなんだ？」

やがて、影から解放された男はその場に崩れ落ちる。

「！」

コンクリートの地面に体が触れると、男の四肢に微弱な痛みが走った。

「だから、衝撃与えると崩れるって言ってるだろ？　あぶねーな」

「なんなんだよっ！！　俺の体に何が起こってやがる！」

やれやれ、といった様子の詠子は例のドリルを霧散させ、装備を解除した。

「いいか、てめーの手足に影で作ったコアを埋め込んだ。

わかってると思うが、アタシの能力は”影”を操る。

そして影はアタシが任意に他の物体に変化させる事ができる。

つまり、お前の手足に埋め込んだアタシの影をいつでも好きな時に何か別の物体に変えられるってことだ」

わかるか？　と付け加える詠子。

その説明を聞いて、男はその手足に埋め込まれた塊を見つめて脂汗を垂らした。

「理解したようですね。では、先ほどの質問にお答え願えますか？　答えて頂けたら、体を元に戻して差し上げます」

「そんなことができるのか!？」

「詠子の力を持ってすれば、貫通した体を復元することも可能です。ただ、気をつけなくてはならないのは”光”です」

シュウの言葉が男の頭に響く。

「今は街灯がありますから、そこかしこに影があり、勿論アナタの体にも影は無数に作られています。しかし、暗闇の部屋に入ったり、コア自体に光が照射されるとコアの影が霧散し、アナタの手足はただ貫通しただけの手足となります。まあ、運が良ければ死にはしないでしょうが、このまま生活するのも不便でしょう？」

「なあに安心しなよ。そのまま放置するってのはアタシの性には合わないからさ。保険みたいなもの。ここから万が一逃げられてもアタシはそのコアを気にしながら生きていかなくちやならないわけだね。ただ質問に素直に答えてくれればいいのさ。それでアタシたちもアタシもハッピー。わかる？」

愕然とした。もしもこの場を切り抜けられたとしても男はこの先、このコアとやらを守りながら生きていかなくてもはならなくなったのだ。

正確に言えば、左右の前腕部分と左右のふくらはぎにコアが埋め込まれているため、その部分を守らなければならない。

ご丁寧に血管が集まっているような場所を貫通させた所に、彼女の非情さが伺えた。

「も、もう一度質問の中身を……聞いてもいいか？」

先ほどから流れ出している脂汗は止まらない。体中汗だくになって、開いた口からかうじて出た言葉がそれだった。

「……レインボウの誰と接触しましたか？　もしも幹部だしたら、

その容姿、能力、コードネームをお答えください」

「……」

「なあなあ、アタシと天音は腹あ減ってるんだ。どっちにするにも手短に頼むぜー」

男は考え込んだ。このまま答えてしまえばコアを解除され、貫通された手足は復元し、アビリティズに命を脅かされることはないだろう。

しかし、今度はレインボウの順番だ。

アビリティズとは違い、レインボウの構成員は3桁以上の数が存在しているはずだ。そんな奴らから逃げ切れる自信がない。

「……くそっ！」

どちらを選んでも”死”が待っていることは変わらない。それが早いか、遅いか、の違いしかない。

「そうですね。では取引致しましょう」

「とり……ひき？」

ギリギリの状態で悩んでいた男に、シュウは少し優しい口調で提案した。

「ええ、取引です。もし、アナタが先ほどの質問に全て答えてくれると言うのなら、レインボウからアナタの身を守りましょう」

「ほ、本当か!？」

「はい。ただし条件があります」

「条件？」

「アナタの身を守れるのは3日間。その間に海外に逃亡するなり、個人情報抹消するなり、整形するなり、なんともして下さい」

「3日!？」

「これが最大の譲歩です。これ以上は付き合いきれません」

冷たく言い放つシュウ。

3日という短い期間で何ができるのだろうか。

いや、だがここで果てるよりは幾万倍もマシであるのは確かだった。

「わ、わかった……その代わり、3日間は必ず保障してくれ」

「了承いたしました。では取引成立ですね」

「俺が知ってるのは、レインボウ幹部の一人だ」

シュウの条件を飲んだ男はポツポツとレインボウに関する情報を話し始めた。

「―――では、アナタは月例能力者保護集会に来ていた幹部に接触した、と？」

「ああ、俺はその集会の設営係としては潜り込んでいた。ソイツはどこで染めたのか真っ赤な長い髪をした女だった。人望が厚いのか、俺や他のバイトの人間にも気さくに話しかけてたよ」

「なるほど。では何故アナタは彼女がレインボウの幹部だと知ったのですか？」

当然の疑問である。情報の保持すら許さないレインボウ、その幹部ともあろう人間が簡単に正体をバラすとは思えない。

「俺の能力の賜物だ。俺は自分の気配、匂い、音などを消す力を持っている」

「ああ、それは知ってるぜ。おかげで探し出すのを苦労したもんさ」ちっ、と舌打ちをしながら、苦々しい顔している。相当の苦労が感じられる。

「……その力で奴の通話を盗み聞きした。とはいえ、業務連絡のよ
うなもので女が”レッド”と自分の事を名乗ったことしか情報は得
られなかったがな」

「つまり、コードネームである」と

「そうだ、レインボウはお前らも知っている通り、表向きは能力者
の尊重と保護を訴え、能力者の育成、就労まで面倒を見る非営利団
体だ。その実、俺たち能力者が作り出したこの裏社会を牛耳る管理
者って所だが、その平社員、つまりは構成員の全ては番号で管理さ
れている。だが、その番号ではなく”レッド”というカラーネーム
を使うのは幹部に限られた事だ」

「その情報はどこから仕入れたのですか？」

「その昔、好奇心からレインボウで働いていたことがある。相棒と
一緒に潜入し、情報を掻っ攫い、高い金で世間にばら撒こうとした
んだが、な」

「？」

「俺は能力と全ての策を尽くしたおかげで、難を逃れたが相棒は殺
された。それはもう凄かったぜ、俺は半年はまともな飯が食えな
かった。……まあ、そんなわけでレインボウの情報はコレつきり、探
らねえって決めたんだがなあ」

ふ、と影を落とした男は誰かに謝っているような、悼んでいるよう
な、そんな表情をした。

「にしては、性懲りもなく幹部の情報なんて探ったんだな、馬鹿だ
なアンタ！ あっはっは！！」

詠子は手を叩きながら大きく口を開けて笑う。

おそらく憂いているのであろう、男などそっちのけだった。

「月例能力者保護集会に出向いたのは、そこにゲストで呼ばれた議
員さんを調査するためね。まあ、情報屋としての仕事さ。あまり
にも、その議員と女が仲良く話してるもんで、不倫相手かなんかか

「と思って探りを入れたらこれだ」

大きくため息を吐くと、話を続けた。

「俺がレインボウで働いていた時の仕事は、危険水域を超えた力を保持している能力者の抹殺と、主に小さい子供の能力者を捕縛することだった。命令はいつも口頭で伝えられた。何故かアイツらは俺の居場所を特定していた見たいで、公園でもコンビニでも飲み屋でも、どこにでも現れたもんだ。そしてソイツは男なのか女なのかもわからなかった……そんなもんだ、俺の知ってることなんて」

長く話したせいで疲れたのか、男は押し黙った。

「なるほど。それでは能力はわからなかったのですね」

「え？」

「幹部の能力です。レッドというコードネームを持った女の能力は知らない、と」

「ま、まあ、そうだが」

「そうですか。では引き上げましょうか、詠子、天音」

急に興味が無くなったのか、シュウは来た道へと踵返した。

それに続けて、空腹と眠気で今まで何も喋らなかった天音が楽しそうに付いてった。

「お、おい！ 待てよ！ 3日間守ってくれるって話はどうなるんだ！」

そう約束したはずである。男はてっきり、このままアビリティーズがボディガードしながら身の安全を保障してくれるのだと思っていた。なのに、この娘達は何事もなかったかのように帰っていくではないか。

「おっさーん。ダメだよ。契約違反だ」

「なんだと!？」

ヒヒツと不気味な笑いを浮かべる詠子は、笑いながらそう言った。

「アンタ、シュウになんて言われたっけ？」

「レインボウの情報を教えてくれたら、3日間――」

「っちがーう！！」

「！」

男の言葉を遮る詠子の顔には、未だ不気味な笑顔が張り付いている。何かがおかしい。契約違反などしたつもりもなければ、全ての情報は吐露したはずだ。

「シュウは”先ほどの質問の全てに答えてくれる”と言うならって言ったのさ。そして質問内容は、容姿、能力、コードネーム」

「！！……ま、まさかお前らっ！」

「そう！能力の情報を持っていなかった！つまりアンタは契約違反をしたってわけだよ！安心しなよ、そのコアはそのままにしておいてやるから。コアを爆破したり切断したりしないだけ有難く思いな！！あはっ！あははははははっ！」

「てめえっ！ふざけるなよっ！！」

闇夜に木霊する程に大きな笑いが、路地裏を包み込み、男はその笑いと理不尽とも言える契約に苛立ちを隠せず、少女に向かって特攻をかけた。

自分の体を肩から詠子にぶつける。さながらショルダータックルのように少女の体を吹き飛ばそうとした。

「なっ！？」

しかし、男の体は通り抜けるだけ。

詠子の体はまるで電波の悪いテレビのように、不明瞭な姿をしていて、この場に体があるようには見えなかった。

「ははっ！アタシの力は影。影に実体を溶け込ますことなんて簡

単なことだよ。ま、せいぜいレインボウから逃げ切ってみなよ。アタシたちはアンタをどうこうするつもりはないからさー。んじゃねー」

それだけ言うと、詠子の姿をしたソレは足元の影にドブンと飛び込み、二度と現れることはなかった。

「ちくしょう！　なんてことだ！！」

アビリティズを甘く見ていた。

原因は彼女たちの容姿があまりに幼かったからなのか、それとも影の力とシュウという女の話術によって冷静な判断ができなかったからなのか、それはもう今となってはわからない。

事実、彼は絶体絶命の窮地に立たされている事だけは確定的だった。

「マズイぞ！　奴らはどこで見ているかわからない、俺がアイツらに喋ったことなんて今頃――」

「お見通しだよ」

「！」

突然背後から声がした。

慌てて男が振り向くと、そこにはビルの壁だけがあった。

「え？」

「こっちこっち」

さらに元の方へと振り向くと、目の前に二人組みの男女が立っていた。

男女二人は真っ黒の軍服のロングコートを着ていて、あまりにも常人とはかけ離れた存在であるのは確かだった。

一人はスキンヘッドの大男で、サングラスを掛けている。もう一人は先ほどのアビリティズのような女子高生風の女だ。金髪の髪をポニーテールに結っており、男とは違い、軍服に合わせたベレー帽を被っていた。

そして、その女が楽しそうに口を開く。

「ダメだねー。ダメダメだ。君は生かされていたっていうのに」

「あ……あ……」

震えが止まらない。足も腕も、体全体が振動しているかのような、そんな恐怖が男を襲う。

「君が持っている情報なんてものはそれほど重要じゃないんだよ、実際。だってそうでしょ？ 僕達の名前とか、見た目とか、バレたからってなんだっていうのかな。んん？」

「……」

「あはっ？ 怖いのかな？ 可哀想に。でも君が悪いんじゃないか」
楽しそうな足取りで男に近づき、顔を近づける。

「僕たちを裏切ったりするから」

耳元でそう囁くと、満面の笑みを浮かべた。

「う、う、裏切ったわけじゃないっ！ 本当だ！ あ、あ……そう

！ そうだ！ アビリティズだ！ レインボウの対抗組織筆頭と呼ばれるアイツらの情報をアンタ達に教えてやろうと思って！ う、嘘じゃない！」

「え？ そうなの？ そりゃあ、嬉しいな。僕は君を殺さなくて済むんじゃないか」

明らかに嘘だと判るほど動揺している男の見苦しい言い訳を本気で信じたのか、女は嬉しそうに手を叩いた。

「それじゃ、どんな情報を手に入れたのかな？ 聞かせてよ」

「あ、ああ！ アビリティズは——」

男は、アビリティズ3人の容姿と呼び名、そして詠子の能力を伝えた。

「へえ。みんな若いんだね。僕と同じくらいかな。楽しみだね」

「そ、そうなんだ。あんなガキ、アンタなら楽勝だろうよ」

「それにしても中々の情報だね。容姿、呼び名はともかく能力を一つ、仕入れてきてくれたんだもんね」

ニコニコと笑顔を絶やさない女。一方で姿を現してから微動だにしない男。あまりに不自然な二人組みだ。

「な、なら助けてくれるのか！」

「そうだねー。僕たちを裏切ったのは許せない行為だけど、汚名を返上できるくらい重大な情報を教えてくれた事で相殺、って感じだね」

うふふ、と女は先ほどの詠子とは違い、口を手で押さえながら上品に笑う。

「ホントか！？ それなら——」

「そういえば、君は知っているかい？」

唐突に女は男の歓喜の叫びを遮ると、淡々と話し始めた。

「情報、というものは量より質さ。例えば……そうだね、僕たちレインボウとそれに敵対する組織。ここではアビリティズにしようか。そんな僕たちと彼女たちは戦争をしているわけで、何も遊んでいるわけじゃないんだ。だから、情報というものは重要であると共に、その情報がどんなものか、が重要視されるわけだ」

「？」

「情報ってのは有益なもの以外は塵芥と同意。前菜にもならない、生ゴミさ。だから君は生かされていて、アビリティズには見殺しにされる」

「一体、何を話しているんだ？」

「ふふっ、話は簡単。能力者との戦いにおいて、重要なのは名前や

容姿なんかじゃない。”能力”さ。僕たちの力を知らない君は例え他にどんな情報を持っていたって、取るに足らない人物。だから君は生かされた」

女は闇夜の路地裏でステップを踏むように、踊りながら話を続ける。

「君が生かされた理由は唯一つ。君のその屑みたいな情報に引っかかる敵対組織を探し出すためさ」

くるり、と体を一回転ターンさせると、またも上品に笑った。

「だから、君は生かされていた。そしてそれに気づいたアビリティズは見殺しにして素早く撤退したのさ」

「生かされていた？ 俺が？」

「そうだよ。そして君はもう用済みなんだ。残念ながらね」

ここで女は心底悲しい、という表情を浮かべた。目には今にも溢れそうな涙が溜まっている。

「ああ、悲しいね。我が同胞を処分しなければならないのが、僕たちの嫌な所さ。そうでしょ？ ブラック」

「……そうだな、ホワイト」

綺麗な涙の飛沫を飛ばしながら、大男の方へとターンし、そう呼びかける。

ブラックと呼ばれた大男は、やはり微動だにせず、素早くそして力強く同意した。

「しょ、処分！？ だって、アンタさっきは！」

「贅というのは鮮度が命だね。もう君の利用価値は無くなったのさ」

「なんでだ！ アビリティズの情報は教えただろ？！」

「ふふっ、そうだね。僕は質の高い情報を持って来てくれる優秀な人材は好きだよ」

「だったら！」

男はコアが埋め込まれた両腕で、ホワイトの肩を掴むと前後に揺すった。

「でもね」

今までニコニコとして上品に笑っていた彼女は、その一言と共に表情を一変させた。

それはさながら、氷のような冷徹な表情であった。

「僕はね、嫌いなんだ」

「き、嫌い！？ 一体どうして！？」

ホワイトはその冷徹な表情を保ちつつも、微笑を浮かべた。

それは男にとって、自分に災厄をもたらし命を地獄に引きずり込む悪魔にでも見えただろうか、それとも今までの罪や後悔の念を払拭し全てを楽にしてくれる神に見えただろうか。

今となっては彼に問いただす事は出来ない。

「僕は”嘘吐き”が大嫌いなさ」

瞬間、男の視界はブレーカーが落ちたかのように暗転した。

そして、二度とその明かりが付くことはない。

彼の死を嘆いているのか、嘲笑っているのか。ホワイトは氷の微笑を保ちつつ、彼の顔を両手で包むと、その頭を胸に抱きかかえた。

「ブラック。本社に持ち帰って、吊って上げよう」

「ああ、わかっている」

彼女の両手が掴むものは彼の頭、ただそれだけだった。

男の頭は体と完全に分離され、体は暗い路地裏で両手、両膝をコンクリートの地面に付けて座っていた。

「ホワイト、先に行っている。後片付けをしてから行く」

「……ブラック、彼はもう断罪されたじゃないか。それでもまだ君

は彼の死を冒読するというのか？」

「任務だ。何度も言わせるな、先に行け」

物悲しげな表情を浮かべるホワイトに、サングラスによって表情は伺えないが何か呆れたような口調でブラックは嗜めた。

「……わかったよ。あとはよろしくね」

「ああ、悪いようにはしない」

彼女は諦めた様子で肩を落とすと、素直に引き下がった。

ふ、と自分の抱えていた男の顔を見ると、何か言いたそうな表情をしたまま凍っていた。

「……そうだね。……今夜はなんて理不尽な夜なんだろうね」

男の頭が頷いたように傾いた。

超能力集団アビリティーズ（3）

曇り気味な空は、まさに冬といった空模様で、冷たい風が吹き付ける今日は冬季の名に恥じない程の寒さだった。

「――で、あるかして」

チヨークの乾いた音が響く教室では、一生懸命に黒板の文字をノートに写す生徒と、話半分でボーっとしたり寝ていたりする生徒で二極化されていた。

雑談などをする生徒はなく、良くも悪くも静かに授業を受けている分、教師にとってはやりやすい環境でもあった。

「ふぁーあっ」

暖房の効いた教室の中では、例え今が昼食前の時間でも眠気は襲ってくるもので、詠子はノートも頭の中身真っ白になっていた。

アビリティーズは高校に通っている。

その学校には力の差は多少あるものの、能力者の生徒も多く通っており、その詳細については個人差によるが、その能力者にとって彼女らがアビリティーズという事は周知の事実であった。

アビリティーズの面々は2年1組というクラスに所属しており、今は日本史の授業中である。

「……」

頭を真っ白にして、遠くを見つめる詠子と違いシュウは真面目にノートを取っていた。

見た目通りの秀才ぶりで、学年でもその学力はトップクラスなのだという。

そして、最後の一人。天音はというと、

「！！ 詠子ちゃんっ！ それ天音の”てんむす”だよー！！」

と、叫びながら椅子を倒して立ち上がっていた。

「……んあ？ あ、ありゃ？ てんむすは？」

「お早う神城^{かみしろ}」

当然のように教室中から注目を浴びる天音は、寝ぼけ眼で正面を向いた。

そこにはニコニコと笑って立っている男性教師が居た。

「え？ せ、せんせい？」

「はい、先生です。そんなことより神城お、てんむすを紫藤^{しどう}に取られたみたいだなあ」

笑顔の教師は優しい口調でそう言った。

「そ、そうなんですっ！ ひどいんですよー詠子ちゃん！ 天音がお腹空いて死にそうって言うてるのに、一人で全部食べちゃったんです！ そしたらシウちゃんが天音の分って言って新しいの作ってくれたのに、それも食べちゃったんですよ！？ 酷いですよね！ ね？ 酷いでしょ、と必死に同意を求めてくる。

そんな天音の話をじっくりと聞いていた教師は、うんうんと頷きながらも教科書を筒状に丸め始めた。

その間も笑顔は絶やさない。

「そうかそうかい、可哀想になあ。よし！ じゃあ後で紫藤の奴は先生が懲らしめてやるからな。わかったなら席につけ。今は授業中だぞ？」

遠くで「なんで私が！」と叫ぶ詠子の声が聞こえたが、教師は無視してそう天音を嗜める。

「じゅぎょうちゅう？」

「そうだぞー。さ、倒した椅子を起こして、そこに座ろうな」

頭に疑問符を浮かべながらも指示通り倒した椅子を起こした天音だが、席に着きながらもまだ首を傾げていた。

そして、そのまま教師に丸めた教科書で頭を引っぱたかれた。

教室に小気味良い音が響き、教師と生徒は何事もなかったかのように授業を再開した。

残ったのは半べそを掻きながら状況が把握できない天音だけだった。

「ま、いつものことだね」

苦笑しながら言った詠子の言葉で全てが説明されていた。

＊

「痛かったよー」

授業も終わり、昼休憩中でも天音はまだ半べそを掻いていた。

「いや、そりゃアンタが悪いでしょうが。なのに何故かアタシも怒られたし」

口を尖らせるのも無理はない。

授業終了後、詠子は何故か”てんむす泥棒”の汚名を着せられて教師にやっぱり教科書で引っぱたかれていた。

「アナタは大きな欠伸をしていたでしょう。先生にも聞こえてたわよ、当然」

日直のため黒板に書かれていた白い文字を消し終えたシュウは二人に近づいてそう言った。

「うわ、あれかよ……でも、てんむす泥棒は止めてほしいなあ」

「詠子ちゃん、盗ったもん」

「だから盗ってねーよ！……もう、いいから飯食おうぜ」

やれやれ、と呆れ気味にシュウへと振り向くと、シュウは少し申し訳なさそうに佇んでいた。

その様子に違和感を覚えながらも机の上に目をやるといつもならあるはずの物が無いことに気づく。

「あれ？ シュウ、今日の弁当は？」

3人はいつもシュウが毎朝作ってくるお弁当を昼食としていた。そのため、昼休憩になるとシュウの席に集まるのが習慣だった。本来なら授業が終わり次第、シュウの机には3つのお弁当箱が並んでいるはずなのだが。

「ご、ごめんなさい。寝坊……しちゃって」

チョコレートの粉が付着した制服の袖口を払いながら軽く頭を下げる。

「ええっ!?　じゃあ今日の昼ご飯どうすんの!?」

「そういえばシュウちゃん、今日は天音よりも起きるの遅かったもんねー。お弁当なんて作れないよねー」

驚愕の詠子と、特段気にした様子のない天音。

「だ、だってしょうがないじゃない。昨日の夜は帰るのが遅かったんだし、その後だって仕事があったんだから」

「それならそうと早く言えばいいじゃんかー。どうしよう、もう食堂もいっぱいだろうし、購買だって行列が出来てるんだろうなあ」
なんとも面倒くさそうに吐く溜息がシュウの癪に障ったのか、

「いつ、いいわよ!　私を買ってくれば済む話でしょう!　余り物でも文句は言わないでよ!」

と、珍しく大きな声を上げると床を蹴って廊下へ飛び出して行ってしまった。

「え、ちよっと!?　別にそこまで……って、行っちゃったよ」

どうも詠子自身はシュウを非難していたわけではないようで、自然と出た言葉と溜息だったようだ。

「シュウちゃん、大丈夫かなあ。ちっちゃい時からいっぱいの中、嫌いだったから……」

「うーん、確かに。シュウは人混みを避ける傾向があるね。この前だって限定のケーキ食べたいっていうから一緒に行ったのに、人が多過ぎて途中で帰っちゃったしね」

学校の昼食を争う購買や食堂の人数はおそらく限定ケーキの比ではない、という事を知っている両者は、果たしてシュウが無事購買のパンを買えるのか、という不安に駆られ始めていた。

「よし、こうなったら奥の手だ。天音、シュウに電話してパンはいから戻って来いって伝えて。アタシが食料を調達して来てやる！」

「大丈夫なの？ 詠子ちゃん」

ぐっと握りこぶしを作り自信ありげに笑顔を作ると

「任せとけて！ んじゃ、ちよっくら行ってくるぜー！」

シュウ同様廊下へと飛び出して行ってしまった。

「詠子ちゃん、まさか”てんむす”みたいに盗むつもりなのかなあ……あ、シュウちゃんに電話しなきゃー」

指を顎に当てて思案に耽る素振りを見せるが、天音はあまり物を考えている様子ではないようだ。

＊

校舎から通路を渡ると食堂と購買部が設置されている別棟があり、大抵の生徒はここで昼食を済ます。

中にはコンビニで事前に購入するもの、アビリティズのように弁当を持参するものもいるが休憩中、学校外に出ることは禁じられていた。

その食堂と校舎をつなぐ通路に彼女達はいた。

「ふふ、大量大量。我が校の購買部はクオリティが高いですわねー。外で買うよりよっぽど美味しいもの」

うっとりとした表情で自分の胸に抱えてある大量のパンを見ながら

優雅に歩く女生徒。

その隣にはパックのカフェオレだけを片手にうんざりしたように歩く女生徒。

「どうするんですか、そんなにいっぱいパン。まったく、いつも言ってるじゃないですか、小食なんだから買いすぎないでくださいって」

カフェオレに刺さるストローを吸いながら、本来なら大きいどんぐりのような瞳を半分ほどに細めて、非難めいた視線浴びせる背の低い女子。ショートカットがよく似合うボーイッシュな様相を呈していた。

「いらぬ心配だわ。残れば圭^{けい}だって食べるでしょ？　っていうか食べなさい」

一方、パンが両手からこぼれないように、えっちらおっちら、と不安定に歩くのは

腰まである長くて赤みがかかった髪が特徴の高身長な女性だった。

「どうせ残すだろうと思って私は何も買いませんでしたけど、この量はさすがに食べ切ったら太っちゃいますよお」

「いいじゃない、女の子は少しくらいふくらしてる方が殿方には評判が良くてよ？」

「とか言いながら、萌^{もえの}乃先輩はすっごいスタイルいいじゃないですか」

「当たり前ですわ。別に男の子からの評判が良からうが悪からうが私には関係の無い事だもの」

他人には太れと言いながらも自分は拒否する傍若無人さが彼女の特徴でもあった。

すべて理解しているだろう圭と呼ばれた少女は、よもや何を言っても無駄だ、と諦めている。

「つとと、いたいた！　おーいっ！　萌乃ー！　圭いー！」

そんな様子で歩く二人を呼ぶ大きな声が聞こえてきた。

「？」

同時にそちらの方向へ向くと知っている顔が走ってきているのがわかった。

「げっ」

瞬間、萌乃の口からは反射的にカエルの鳴き声のような声が発せられていた。

その原因。笑顔で駆け寄ってくるその姿は紫藤詠子のものであった。

「逃げるわよっ！ 圭！！」

「え！？ ちょっと、先輩！？」

声を掛けられてから逃げると判断するまで3秒とかかかっていない。脱兎の如く校舎へと逃げ込む萌乃を慌てて圭は追いかけた。

「逃げんな！ コラァー！！」

「逃げるに決まっているでしょう！？ 貴女達と関わるとうるくな事が無いんですもの！」

恐ろしいスピードで逃げ回る萌乃に姿を見失わないように追いかけるのが精一杯の圭。

その後ろからは更に有り得ない速さで追いかけてくる詠子の姿が見える。

「ちょっと頼みがあるだけだって！ とりあえず止まれコラァーっ！」

「嫌ですわ嫌ですわ嫌ですわァーっ！ 圭なんとかしなさい！」

「ちょッ！？ 無理ですよァーっ！ 詠子先輩に勝てるわけないじゃないですかァーっ！」

「ええい、邪魔だ圭！」

ただでさえ狭い廊下に生徒がちらほら立っている状況で人一人追い抜くのは難しいと判断した詠子は手のひら大の球体を影で作り出すと、前方横の廊下の壁にそれを投げつける。

その後その球体目掛けて飛び蹴りしながら、足を突き出すと一瞬だけ足が壁に張り付いた。

「いっ！？」

その状態から詠子は驚愕する圭を飛び越えるように壁から地面へとジャンプし、速度を維持したまま萌乃を追いかけた。

「わーっ！？ 圭のバカぁー！ 役立たずー！」

「圭如きにアタシが抑えられるかっ！ お前も止まらなないと捕縛するぞ！」

喚き合いながら走る二人。詠子に抜かされた圭は頭が痛くなるのを感じた。

「ひ、酷いなぁ二人共……もー待ってくださいよー！ 先輩！」

その後、二人は完全に停止するのだが、それは教師に怒られたから、というなんとも現実的な理由だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1727y/>

無力のアビリティズ

2011年11月22日17時30分発行